



日本人は省エネルギー意識が高いか

Are Japanese Energy-Conscious People ?

富田 鏡 二*

Kyoji Tomita

昨年12月の地球温暖化防止京都会議での各国の虚々実々の駆け引きが記憶に新しいが、エネルギー分野の今年のキーワードの一つは「省エネルギー」であろう。「省エネルギー」と言えばおよそ20年前の石油危機を思い出す、あの時と今ではエネルギー需給を取り巻く環境がだいぶ違うようだ。

石油危機の時には原油価格が高騰し、エネルギー価格だけでなく石油製品を始めとした多くの品物の価格が上昇した結果、産業界から家庭までエネルギーや資源の節約が叫ばれた。結果として、我が国はエネルギー消費を削減しながら経済成長を果たした。当時、原油輸入の多くを中東に依存し、ほとんどエネルギー資源を持たない我が国のエネルギー供給基盤の脆弱性を政府やマスコミも指摘し、エネルギー・資源の有効利用の必要性を声高に主張していた。しかし、国民や企業を「省エネルギー」に走らせたインセンティブは、セキュリティや環境に対する危機感だったのか。それとも、単なる経済性を追求した結果だったのだろうか。

弊社の都市生活研究所が昨年行った「環境問題に関する生活者への調査」によると、9割以上の人が、「今の生活はエネルギーの使いすぎ」と感じているものの、自分の生活について「いつも省エネルギーを心掛けている」と言い切れる人はわずか2割に過ぎないとのこと。以下はアンケートの結果を4つのモデル世帯に当てはめたものである。

- I. 40代ファミリー世帯（夫婦＋子供2人）
 - ・省エネルギーは主婦が一人で頑張る
- II. 熟年夫婦世帯（60代夫婦2人）
 - ・二人で協力して省エネルギーを実践
- III. 女性の単身世帯（20～30代）
 - ・省エネルギーには熱心だが、シャワーは別
- IV. 男性の単身世帯（20～30代）
 - ・省エネルギーには無関心、車とシャワーは譲れない

*東京ガス㈱トータルエネルギーシステム部部长
〒163-1059 東京都新宿区西新宿3-7-1

い。

うなずかれた方も多いのではなからうか。

「省エネルギー」を車の前輪とすれば後輪は「省資源」であろう。「資源を大切に」とよく耳にするが、「それは国民の意識が高くないから」と考えるのはシニカル過ぎるだろうか。「資源の有効利用」と聞いて連想する言葉は？多くの人が「リサイクル」と答えるのではないだろうか。リサイクル型社会という造語まである。資源を大切に、環境に配慮した理想的社会を連想させたいのであろうが、「リサイクル」は資源の有効利用に必要な3つのRの一つ、しかも3番目に過ぎない。「省資源」のためにまずすべきことは、「資源の削減（Reduce）」であり、次に使った資源の「再使用（Reuse）」、そして最後にグレードの低い別のもので変換することによる「再利用（Recycle）」である。「資源の削減」と「再使用」を忘れた「リサイクル」は、資源多消費の免罪符になりかねない。何年か前、環境保全への取り組みをテーマにした子供達の国際シンポジウムのニュースをテレビで見たが、ヨーロッパの子供達が3つのRをしっかりと理解していたのが印象的であった。

エネルギー・資源の多くを輸入に頼っている状況は今でも少しも変わらず、更に地域そして地球規模の環境問題も加わり、省エネルギー・省資源の必要性は石油危機の時以上である。「日本は世界でもっとも省エネルギーが進んでいる」と言われる。確かにGDP当たりの一次エネルギー消費量は先進諸国の中では非常に低いが、国民の省エネルギー・省資源に対する意識は本当に高いのだろうか。快適な生活への執着も根強く、エネルギー価格が高騰する環境にも無い今（現在はむしろ価格低下傾向）、国民の省エネルギー・省資源に対する意識をもっともっと高くすることで、法的強制や税的手法にできるだけ頼ることなく経済発展、環境保全、エネルギー確保のトリレンマを切り抜けたいものである。